

# ナイチンゲールの生涯の素描と業績

金 井 一 薫

日本病跡学雑誌 第88号

(2014年12月25日)

第61回 日本病跡学会総会

●シンポジウム ナイチンゲールの遺産——貴婦人の葛藤

## ナイチンゲールの生涯の素描と業績

金井 一 薫\*

### I ナイチンゲールの生涯を理解するために

フロレンス・ナイチンゲール (Florence Nightingale : 1820~1910) は, “クリミアの天使”として讃えられている女性である(図1)<sup>1)</sup>。日本における彼女の生涯のイメージは, 多くの青少年少女向き伝記によって作られてきたところがある。また, 明治期から昭和15年までの国定修身教科書の中で, 看護という職業を創始した博愛の人として取り上げられたことから, ナイチンゲールが女性の鑑として位置づけられ, クリミアの天使としてイメージ化されてきたという事実が存在する。

しかし今日において, リットン・ストレイチ, F.B. スミス, さらにはヒュー・スモールなどの男性伝記作家たちによって, ナイチンゲールの負の側面が強調されて描かれるようになると, “クリミアの天使”としてのナイチンゲール像は大きく歪み, 「ランプを掲げた過失責任者」<sup>4)</sup>として, 史実とは異なる新たな誤解が生まれようとしている。彼ら伝記作家たちは, 第一次資料をほとんど無視しているか, 資料のある部分だけを取り上げて全体像を見ないまま, 根拠のない誹謗中傷や攻撃を展開している<sup>3)</sup>。

このように, ナイチンゲールの生涯と業績は, 未だに正確に把握されていないのが実情である。

本講演では, ナイチンゲールの生涯とその業



図1 クリミア帰還後のナイチンゲール

〔文献1より引用〕

績を正しく伝え, ナイチンゲールが成し遂げた業績が, 今日の医療と看護に大きく寄与している点を強調したい。

まず, ナイチンゲールの生涯のストーリーを事実に基づいて把握するために, 信頼できる伝記および研究書を紹介することから始めたい。それらは以下の3点である。

① Sir Edward Cook : The Life of Florence Nightingale. Macmillan & Company, 1913.

中村妙子・友枝久美子訳: ナイチンゲール—その生涯と思想。全3巻。時空出版, 1993。(訳文1240頁)

② Cecil Woodham-Smith : Florence Nightingale 1820-1910. Constable, 1950.

A sketch and achievements of the whole life of Florence Nightingale

\*東京有明医療大学, Hitoe Kanai : Tokyo Ariake University of Medical and Health Sciences.

武山美智子・小南吉彦訳：フロレンス・ナイチンゲールの生涯. 全2巻. 現代社, 1981. (訳文 800頁)

③ Lynn McDonald: Florence Nightingale At First Hand. Continuum UK, 2010.

島田将夫, 小南吉彦訳：フロレンス・ナイチンゲール——直筆が語るその実像, 総合看護, 46巻1号～48巻2号.

上記の伝記, 研究書は, いずれも大量の一次資料を基に編纂されているのが特徴である。ナイチンゲールは, 90年におよぶ生涯のなかで, 膨大な文献を書き残しているため, 伝記や研究書を執筆する時には, こうした一次資料に精通することが大前提である。その点, 上記の伝記, 研究書は, 書簡を含む膨大な一次資料を駆使している点で信頼に値する。特に2010年に刊行された『Florence Nightingale At First Hand』は, 著者がナイチンゲールの印刷文献と書簡の大半を読み込んだ上で著されているだけに信頼度は高い。

これまでに出版された日本人によるナイチンゲール伝の多くは, 上記の①および②をベースに書かれているが, 中にはリットン・ストレイチヤヒュー・スモールの伝記をベースに説を展開したものもある。したがって, 伝記本を読む時には, 作者が誰の著作を土台にしてストーリーを構成しているかについて, 十分に吟味したうえで, さらに作者がどれだけの一次資料を読み込んでいるかという点にも注意して読む必要がある。とにかく, ナイチンゲールの伝記は, たかが伝記, されど伝記なのである。

さて, ①～③の伝記に基づいてナイチンゲールの生涯を俯瞰してみると, 彼女の一生は3期に区分することが可能となる。

第1期: 誕生から32歳までで, 人間としても女性としても自立が阻まれて苦しんだ時代である。しかしこの時期に, 学問の基礎をマスターし, 新しい社会を創生していくための知見を十分に蓄積したとみることができる。

第2期: 33歳～50歳代半ばまでで, 人間として, また女性として自立を果たし, 社会に向け

て, 自分らしい仕事を全力で成し遂げた時期である。この時期にナイチンゲールの業績のほとんどが形となっている。代表作となる主要な著作の大半もこの時期に執筆されている。

第3期: 50代半ばから90歳での永眠までで, 自らが提唱した看護や衛生問題の総仕上げの時期にあたる。晩年の10年は視力を失い, 認知機能も衰えてはいたが, 長年悩まされてきた症状から解放されて, 比較的穏やかに生きたおよそ35年間である。

上記の区分の根拠は, ナイチンゲールが成し遂げた仕事の内容や書かれた文献の量と質に基づいている。ナイチンゲールは長年, 持病と闘いながら仕事を成し遂げた女性である。しかし, 著作の量や質を見る限り, 症状の激しさや苦しみなどは微塵も感じさせない。それどころか, 著作の内容からは彼女の精神のほとばしりを感じるし, クリエイティブで先進的で, かつ力強いメッセージを受け取ることができるのである。特に活動期の著作からは, ほとんど病的な痕跡を探り当てることはできない。ただし, おびただしい書簡を紐解けば, ナイチンゲールの心の内や苦しみ・悩み・絶望・希望・期待・楽しみなどが伝わってくる。

## II ナイチンゲールの生涯の素描

フロレンス・ナイチンゲールは, 19世紀初頭, イギリス人の両親が新婚旅行に訪れていたイタリアで誕生した。生誕地のフィレンツェを英語読みして, フロレンスと名づけられた。彼女には1歳年上の姉・パーセノーブがいた。姉もイタリア生まれである。ナイチンゲール家は, イギリスに広大な土地を持つ領主であり, ダービシャー州にリハースト荘と呼ばれる館を建て, ハンプシャー州にはエムブリー荘というジョージア王朝後期の家を購入して住んでいた(図2)。また春と秋の社交シーズンには, ロンドンに住まいを借りて暮らすという, 何不自由のない, 当時の上流階級の典型的な生活様式を満喫していた。

父, ウィリアム・エドワードは, ケンブリッ



図2 現在のエムブリー荘

ジ大学を卒業した知識人で、二人の娘に当時としては最高の教育を施した。教科は古典としてのラテン語やギリシャ語、ドイツ語やフランス語、さらに歴史、文学、音楽にも及んだ。特に妹のフロレンスは、父の教えについていけるだけの才覚があった。フロレンスは17歳の頃までには、誰にも負けない知識力と判断力をもつ聡明な女性に成長したようである。

そのフロレンスが社交界にデビューすると、多くの人々から注目される存在となり、中でもリチャード・モンクトン・ミルズ（後のホウトン卿、国会議員であり詩人もあった）は、フロレンスの才能と人柄に好意を抱き求婚した。フロレンスもリチャードへの思いは熱かったが、結婚は同じ上流階級の世界で生きることにつながり、それでは自らの使命を果たせないという理由で結婚を断った。

ナイチンゲールは、幼少の頃から豊かな暮らしに違和感を抱くことがあり、長じては、その暮らしが自らの女性としての自立を阻んでいることに気づいていった。さらにキリスト教の神とつながる体験を経て、己の人生の目標を神への奉仕、すなわち神に仕えて生きる道を選択する。しかし、具体的な奉仕の姿が明らかになるのは22歳の頃である。それは病人など貧しい人々への奉仕という道であった。

歩む道は定まったものの、病人の看護という仕事は、当時の社会では最下層の人びとが担うものであり、上流階層の娘が働く環境としては

不適であった。それゆえ家族の大反対にあい、それからの10年は自立を阻まれた状態で、苦悶と葛藤の中で過ごした。しかし夢の実現のための努力（政府の報告書に目を通したり、病院を視察したりなど）は惜しまなかった。30歳になり、先の見通しが立たない苦しみの中に、友人夫妻の好意でローマ・エジプト旅行に出かけたが、その旅行中にドイツのカイゼルスヴェルト学園において、看護師としての訓練を受ける機会を得た。この経験は後のナイチンゲールの仕事に大きな影響を与えた。

ナイチンゲールが自らの人生の中で自立という道を歩み始めたのは、33歳になった時である。ロンドンにある女性のための小さな病院（ハーレイ街病院）における“総監督”という立場で働き始めたのである。わずか1年間という短い期間であったが、この間に素晴らしい仕事を成し遂げている。

ハーレイ街病院での契約期間が過ぎ、更新を考えていた頃、クリミア戦争が勃発した。戦場における惨状が新聞で伝えられるようになると、ナイチンゲールはここに自らの使命があると感知した。時の戦時大臣、シドニー・ハーバート（ハーバート夫妻とは長年の交流があった）からの依頼もあって、クリミア従軍が即決された。

戦争はクリミア半島で行われていたが、負傷したイギリス兵たちは黒海の対岸にあるスクタリの地に移送され、そこで手当てを受けた。したがって、“ナイチンゲールが敵味方なく看病した”というのは作り話である。

移送されてきた負傷兵たちは、負傷による死亡ではなく、伝染病に罹したために生命を落としていった。その数1万数千人である。理由は兵舎病院として使われていた建物全体が不衛生であったこと、それに看護の完全欠如によるものであった。それを見て取ったナイチンゲールは、私費で台所を作って調理人を雇い、洗濯場を作っては洗濯女たちを雇い、看護師たちに病院中の掃除をするよう命令し、自らも包帯交換や手術の助手、夜の見回り、膨大な書類書き、危篤の兵士たちの看取りなどを行い、ほとんど睡眠をとらなかったという。

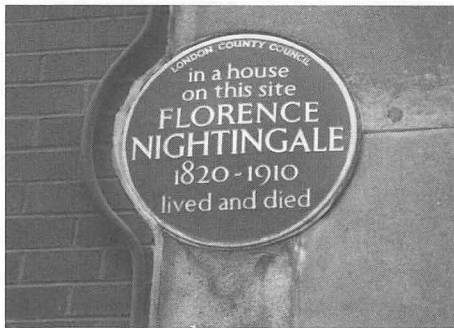


図3 サウス街10番地の住まいを示すブループレート

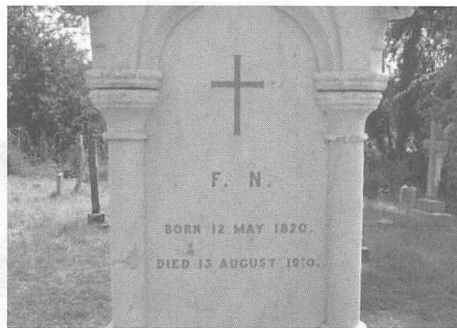


図4 マーガレット教会にあるナイチンゲールの墓

戦争が終結するまでに、ナイチンゲールは回復した兵士たちのために学校を建てて文字を教え、図書館を作って読書を奨励し、酒屋に代わるコーヒー館を建てて憩いの場所を作った。また、本国にいる貧しい兵士たちの家族に送金するための郵便局システムを創設したり、死にゆく兵士たちの最期の手紙を代筆して、家族の元に送り届けたりした。

ナイチンゲールによって提供された看護の世界は、当時の貧困階層出身の兵士たちにとっては、別天地にいる思いであったろう。兵士たちは“ランプを持つ貴婦人”としてナイチンゲールを賛美し、帰国した者たちがその姿を国中に伝え広めた。

戦争終結直前の頃、ナイチンゲールは高熱を出して倒れた。当時は原因が判明しなかったが、感染症であることは間違いなかった。一般的には「クリミア熱」といわれているが、その後の研究では「ブルセラ病」ではないかとの見解が出ている<sup>5)</sup>。一時は危篤状態であったナイチンゲールであるが、一命を取り留めて帰国の途についた。1856年7月のことであった。髪を切り落とし、痛々しい姿となったナイチンゲールは、政府が用意した凱旋のセレモニーに便乗することなく、偽名を使って密かに本国の北の館、リハースト荘に戻った。

帰国後のナイチンゲールは、すさまじい勢いで仕事を始めた。すでに臨床現場に立って看護師として働く体力はなかったが、彼女にはやらなければならない仕事が山積していた。戦地で

地獄を見たナイチンゲールは、兵士の生命を奪った陸軍の組織を、そのままの形で存続させてはならないという信念のもとで動き出した。

そのエネルギーが及ぶ範囲は次第に広がり、陸軍組織の改革、陸軍病院および一般病院の改革、看護組織の改革、訓練看護師の養成、社会制度の改革、法律立案のための助言、英国およびインドの衛生改革など、多方面に及んだ。こうした社会活動から生まれた成果こそ、真のナイチンゲールの業績として認められなければならない。

彼女はクリミア以降、看護の現場に立って仕事をすることは二度となかった。しかしナイチンゲール看護学校が1860年に創設されると、卒業生たちが英国全土はもちろんのこと、世界の各地で活躍し始めた。卒業生たちは“ナイチンゲール”と呼ばれ、ナイチンゲールが考案した教育方式と看護方式とを広め、根付かせていったのである。

晩年になると、長年続いた睡眠障害や心臓痛などの激しく辛い症状から徐々に解放されて、穏やかな日々を過ごすことが多くなった。看護学校の卒業生たちと手紙のやりとりをしたり、彼女たちの訪問を受けたりと、その交流も活発で、折々に必要な助言をしているのが書簡を通してうかがえる。

最期はロンドンの自宅で眠るように息を引きとった(図3)。亡骸は遺言にしたがって、エムブレイ荘の近く、両親が眠る聖マーガレット教会の墓地に埋葬された。墓碑には、これも遺言

通り、「F.N. BORN 12 MAY 1820, DIED 13 AUGUST 1910」とのみ記されている(図4)。

### Ⅲ 知られざる業績——7つの側面

ナイチンゲールは単なる看護師ではなかった。90年の生涯をとおして成し遂げた業績は、その量と質において類まれなものである。本講演では、彼女がもつ以下の7つの側面について述べる<sup>2)</sup>。

- ① 著述家
- ② 看護の発見者
- ③ 優れた管理者
- ④ 統計学者
- ⑤ 衛生改革者
- ⑥ 病院建築家
- ⑦ ソーシャルワーカー

#### 1. 著述家, ナイチンゲール

ナイチンゲールがその一生で書き残したものは膨大である。特に、クリミア帰還後にはベッド上での生活を余儀なくされ、自室に籠って仕事をしたため、外の世界との交流は、すべて手紙類を通して行われた。それゆえに書簡の数はおびただしい量にのぼり、現存しているものだけでも12,000点以上とされている。筆者が大英図書館の特別室を訪問して閲覧した時には、フォリオ版の大きさで、厚さ10センチもあるファイルに、なんと165巻が保存されていた。中には親しい友人との間に交わされた書簡もあり、本音で書かれたものも多い。そうした書簡の一部には「読んだら燃やしてください!」とか「破り捨ててください!」と上部にメモ書きされていた。ナイチンゲール自身は、こうした手紙類はすべて処分したはずである。しかし、現にこれだけの量の書簡が残されているという事実から、受け手が彼女の死後もいかに大事に保管していたかがわかるのである。

実は、この書簡類はナイチンゲール像を歪める火種になりやすい。特に一部の手紙に書かれた文面だけを見て、ナイチンゲールの性格や信

条を推し量ることは危険である。その手紙が書かれた背景、状況、前後のやりとりなどを見て、総合的に判断する必要があるが、これには多大な努力と時間を要する。そして事実を語るパズルのピースがすべて現存しているとはいえないのである。

逆に、書簡はナイチンゲールの内面や精神状態を知る重要な手がかりになり得る。彼女の病跡を研究する際には、これら書簡の存在は重要な手掛かりになるであろう。ナイチンゲールは自身の内面を細かに綴っているだけに、書簡から彼女の実像をとらえることは可能である。しかし書簡研究は、今、ようやく始まったばかりである。

さらにナイチンゲールには論文、報告書、講演録の類の印刷文献も多く、その数は150点に及ぶ。

ナイチンゲールの著作をつぶさに調査した最初の人物はW. J. Bishop氏で、彼の死後にその仕事を引き継いだのが、秘書のSue Goldieという女性である。彼女がまとめあげた1冊の本は、1962年に『A Bio-Bibliography of Florence Nightingale』(ナイチンゲールの文書目録)というタイトルで出版された。

Bishop氏は、ナイチンゲールの150点の著作に1番から150番まで番号を付け、それらに内容に応じて9項目に分類した。そしてすべての作品に要約と解説を添えている。これによって、ナイチンゲール文書の全貌をつかむことが容易にできるようになった。Bishop氏によって分類された9項目とその作品数は以下のとおりである。

- ① 看護に関する文献：47編
- ② 英国陸軍に関する文献：11編
- ③ インドおよび植民地の福祉に関する文献：39編
- ④ 病院に関する文献：8編
- ⑤ 統計学に関する文献：3編
- ⑥ 社会学に関する文献：9編
- ⑦ 回顧録と献辞：8編
- ⑧ 宗教および哲学に関する文献：4編

## ⑨ その他の文献：21 編

一見しただけでも、ナイチンゲールが手掛けた領域がいかに広大であったかが見て取れよう。ナイチンゲールを“著述家”として位置づける根拠はここにある。

## 2. 看護の発見者、ナイチンゲール

ナイチンゲールは若い頃からキリスト教の神を信じており、神とつながり、神の共労者でありたいと考えて努力した人であった。

神との対話の中で彼女がつかんだのは、「神は全知全能の創造主であり、世界は“神の法則”によって創造され、かつ営まれており、人間はその法則を緻密に探究することによって、よりの確には統計学的な探究によって、確かめることができる」<sup>9)</sup>という内容だった。

この思考を根底にもっていたがゆえに、ナイチンゲールは近世の価値観が色濃く残る当時の宗教思想や、上流階級の人々が抱く保守的生活スタイルと決別せざるをえなかった。彼女は自由思想の持ち主たちが当然行き着く学問的興味、すなわち近代科学への関心を深め、数学や統計学さらには物理学などの勉強を進めたとみられる。

ナイチンゲールは、この世の中に隠れて存在する「神の法則」を発見することで、今とこれからの人間が生きるための新しい道が見えてくると考えた。この発想は社会科学と同様に自然科学の領域にも及んでいる。それによって、ナイチンゲールは社会改革者としての道を歩むこととなり、また一方で、自然科学の知見を取り込んだ看護のあり方を説くことになったのである。

結果として、ナイチンゲールはその著『看護覚え書』を通し、“看護の定義”を明確に表現することができた。彼女は看護とは何かという問いに対して、以下のように応えている。

「看護がなすべきこと、それは自然が患者に働きかけるに最も良い状態に患者を置くことである。」<sup>12)</sup>

「What nursing has to do is to put the patient in the best condition for nature to act upon him.」

この文章には、看護の目的が「自然が患者に働きかけるために……」と、はっきりと謳われている。それは、「自然治癒力が体内で発動しやすいように」または「自然の回復のシステムが発動しやすいように」と意識することが可能である。看護師はこの自然の回復のシステム、つまりは生命の法則に力を貸す仕事であるが、そのためには「最も良い状態」「最良の状態・条件」を生活過程の中に創ることが必要であるというのである。

では、「自然が患者に働きかけるに最も良い状態」とはどういう状態を指すのだろうか。それに応えて、ナイチンゲールは、『看護覚え書』の「序章」の中で次のように明言している。

「看護とは、新鮮な空気、陽光、暖かさ、清潔さ、静かさなどを適切に整え、これらを活かして用いること、また食事内容を適切に選択し適切に与えること——こういったことのすべてを、患者の生命力の消耗を最小にするように整えること、を意味すべきである」<sup>13)</sup>。

「It ought to signify the proper use of fresh air, light, warmth, cleanliness, quiet, and the proper selection and administration of diet—all at the least expense of vital power to the patient.」

この文章には、看護の原理（看護とは自然が創り出した回復過程を助けること）を実行するために、補足すべき新たな看護の視点が追加されている。

つまり、看護とは、空気の質や栄養の質に関することなど、あらゆる生活にかかわる事柄を、「患者の生命力の消耗を最小にするように整える」という方向を目指して行うことだというのである。そのような状態を作ったとき、それが「自然が患者に働きかけるに最も良い状態」なのだ……と。そして「癒そうとしているのは自然であり、私たちは自然の働きを助けなければならぬのである。自然は病気というあらわれによって癒そうとして試みているが、それが成功するか否かは、部分的には、いや全面的に、どうしても看護いかにかかってこざるをえない」<sup>8)</sup>と述べ、看護の働きの重要性を強調したの

であった。

こうして『看護覚え書』の中で繰り返し述べている「生命の法則」「健康の法則」がすなわち「看護の法則」であるという表現が生まれた。「生命の法則」は、すべて神様があらかじめ創った「神の法則」そのものゆえに、人間は自然科学的思考を研ぎ澄ませて、それらの法則の発見に努め、発見した法則を看護実践に適應させなければならないと考えたのだった。

どんな学問領域においても、発見された真理は実にシンプルであり、この世界の仕組みを解き明かすことに寄与している。ナイチンゲールによって指図された看護の原理も、この世の中に存在する看護の営みの意味を教え、人間がよりよい健康的な生活を送るためになくてはならない活動としての、あるべき姿を教えている。

ここに「看護の発見者としてのナイチンゲール」の姿がある。

### 3. 優れた管理者、ナイチンゲール

当時の病院には性質の異なる2種類の施設があった。1つは富裕層が経営するボランタリー病院、もう1つは各キリスト教区にある救貧院病院である。いずれに入院する患者も下層階級の人びとであったが、そこで看護師として働く人びともまた同じ下層階級の女性で、彼女たちには看護の知識も実力も備わっていなかった。

ナイチンゲールが33歳の時に総監督に就任したハーレイ街病院は、ボランタリー病院の1つであった。そこには富裕層の人びとからなる運営委員会があり、大まかな経営方針が出されていた。

当時の病院は、それまで運営されていた建物と組織が壊滅状態にあったために、新たな物件を求めて移転することになった。その病院組織の再建というテーマがナイチンゲールに託されたのである。しかし既設の病院運営は、貴婦人委員会と紳士委員会という反目し合う2つの委員会によって行われていたため、病院の経理は乱脈を極め、さらに病院の管理運営のあり方も混乱していたという。したがって、ナイチンゲールに寄せられた期待は、病院の建て直しと

その健全な運営という、大変重いものがあつた。

就任にあたってナイチンゲールが両委員会に求めたのは、①温水用の配管を各階に引くこと、②患者の食事を上階に運び上げるための“巻き上げ機”(リフト)を設置すること、③現在のナースコールの原型である“弁付き呼鈴”を設置することなどである。この弁付き呼鈴は、「すべての階の看護婦室のドアのすぐ外の廊下で鳴り、かつまた呼鈴が鳴ると同時に弁が開いて誰の呼鈴が鳴っているかが即座に看護婦に判り、さらに暫くは弁が開き放しになっているようなもの」<sup>15)</sup>であると彼女は考えていた。

このように、ナイチンゲールは総監督として働く条件として、まずは病院の設備面の充実を訴えたのである。それは看護とは何かを知っている人にしか考えつかない、当時としては斬新な要求だった。

具体的にナイチンゲールが手掛けた仕事は、まず、古い建物から運ばれてきた家具やリネン類の点検であった。これらはすべて洗濯された形跡がなく汚れており、テーブルクロスや布巾やタオル類はことごとくぼろぼろだった。そこで彼女がまず始めに行ったのは、シーツ・枕カバー・ベッドカバー・テーブルクロス・布巾・雑巾・カーテンにいたるまで、新たに作ったり、洗濯したりして使える状態にしたことである。新たな家具や調度品を新調する必要もあった。

次に、台所の改善である。適当な調理用器具を揃えることからはじめ、保存食を作ったり、パンやビスケットを焼いたりして、健康面を重視した視点を取り込んでいる。

さらに改革は経済面に及んでいった。物品購入のシステムを点検して、無駄を省いた購入方法を選択したり、賃金の額や支払い方法を考案したり、不適切な看護師や使用人を解雇したりと、ナイチンゲールの視線はあらゆる方面に注がれている。

こうして設備や備品や人材が整ってくるにしたがって、ナイチンゲールの目は徐々に患者自身へと向けられていった。

四半期ごとに記述された季刊報告書<sup>11)</sup>には必ず、その時期に入院している患者数、退院した



人数と退院者の病名や退院に至った経過などが明瞭に記されている。そしてハーレイ街病院に入院している患者の特徴の全体像を記して、彼女たちの健康を回復させ、社会へと送り出していくにはどうすべきかを考察しているのである。

ナイチンゲールは一人ひとりの患者を実によく観察し、適切で、丁寧で、温かな看護を提供していった。まさにそれは現代の看護界で行われている“看護過程”そのものである。中にはアセスメントと看護計画が見事に功を奏した事例も報告されており、死への看護を行ったことも明らかになっている。

このように、1年の看護実践によって示されたナイチンゲールの実力をみれば、ナイチンゲールは紛れもなく“優れた管理者”であり、また同時に“優れた看護実践者”であったことが明らかとなる。しかしこれで彼女の管理者としての試練が終わったわけではなかった。それは次に来る大きな使命を乗り越えるために準備された序幕に過ぎなかった。

次に待っていたのは、クリミア戦争従軍という舞台だった。1年半に及ぶクリミア戦争従軍中に、ナイチンゲールが成し遂げた実績は、ハーレイ街病院時代と同質のもので、彼女の優れた管理者としての側面と同時に、優れた看護師としての側面を一層浮き彫りにしている。

#### 4. 統計学者、ナイチンゲール

ナイチンゲールは20代の頃から統計学の祖と呼ばれるアドルフ・ケトレ(1798~1874)の著書に魅せられ、ケトレに師事していた。ケトレは平均という考え方を示した人物として有名であるだけでなく、肥満を判定するBMI(Body Mass Index)という体格指数の発見者でもある。身近な出来事の中にも統計学が使われることを知ったナイチンゲールの喜びは格別だったらしく、あらゆる社会現象の発生を、統計学的手法によって解き明かし、様々な結論を出したいと願うようになっていくのである。ちなみに彼女は、1850年に王立統計学会の初の女性会員に登録されている。

ナイチンゲールの統計学への傾倒は、クリミアからの帰国後に師事した、統計学者・ウィリアム・ファー博士と共に仕事をしたことで一段と深まり、クリミア戦争中に亡くなった兵士の死亡原因を、統計的に分析するという手法を身につけていった。また、ナイチンゲールの主治医でもあり、衛生学の権威でもあったジョン・サザランド博士の援助を受けることで、衛生学領域において、当時としては最先端の知見と技術を修得し、かつて誰も手をつけなかった英国陸軍の衛生問題全般に対する鋭い指摘を行うことができたのであった。

ナイチンゲールは多くの統計図表を作成し、それらを駆使して問題の核心を示しながら、問題解決の方向性を示すという手法をとっているが、これはまさに、今日の調査研究の意義やあり方と通じるものがある。ナイチンゲールの思考は、当時の一般的レベルをはるかに超えたところにあった。その先見性には目を見張るものがある。

事実の意味をしっかりと見極めようというナイチンゲールの思考は、まずはクリミア戦争中における兵士の死亡率の高さに向けられた。そしてある重大な事実気づいたのであった。それはクリミア戦争の最初の7ヵ月間に、病気だけを原因とする兵士の死亡率は年60パーセントに達したが、この原因は排水、清掃、換気に対する衛生上の欠陥と過密にあり、これらの欠陥が取り除かれ、さらに過労と栄養状態の改善がみられたことで、死亡率は急激に下がったという事実についてであった。

ナイチンゲールは、この考察結果を政府や陸軍の要人たちに示し、今後同じことが起きないように対策を練る必要性を訴えたいと考えた。そのために政府筋に働きかけて「陸軍衛生勅撰委員会」を組織し、そこに提出するための報告を書きあげた。それがなかなか出版されないために、匿名で秘密裏に自費出版したのが『英国陸軍の死亡率』という小冊子だった。この中にはナイチンゲールが考案した「図表」が何枚も提示された(図5)<sup>10)</sup>。

冊子を手にした人々は、ナイチンゲールが考

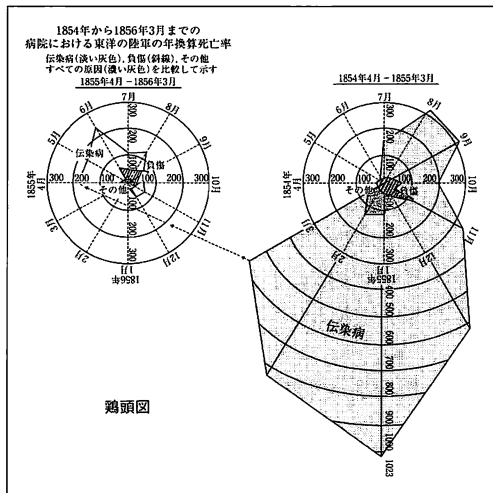


図5 鶏頭図  
〔文献10より引用改変〕

案した独創的な図表の数々を見て、さぞや驚いたことであろう。当時はまだ棒グラフや円グラフが一般的に認知されていない時代であった。小冊子の中には多くの図表や図面などが盛り込まれており、彼女が膨大な時間を費やして作成したこの一連の図表は、英国陸軍の兵士らが置かれた実態の劣悪さを、いかなる言葉よりも雄弁に物語っていたのである。

ナイチンゲールの環境改善への要求は、当初の対象だった英国陸軍の兵士たちの生活から、一般病院に入院する患者たちの生活へ、さらに一般国民の暮らし(特に住居)の改善へと広がっていった。彼女の究極の目的は、不衛生な環境、不健康な住居が伝染病を生む素地とならないよう、人間が生きるにふさわしい環境条件に改めること、そしてそこに確かな看護実践を存在させることにあった。この2点を強調することによって、国民全体の健康を助長し、人々を苦しみから救い、病院病などの疾患から生命を守ることができると強調したのであった。

加えて、ナイチンゲールの統計学者としての才能は、「病院に関する標準統計」の策定という一側面からも見るのが可能である。これはナイチンゲールの関心が陸軍病院から民間病院にも及んでいたことを証明する。

ナイチンゲールが提案した標準方式は、多く

の病院で採用され、1862年9月に発刊された『統計学会雑誌』にも掲載されるなど、病院統計の標準化というテーマを広く医療界に訴えることに貢献した。

結果として、ナイチンゲールの統計学者としての評価は、アメリカにおいて形となった。1874年10月、米国統計協会はナイチンゲールを名誉会員に推薦し、その業績を讃えたのである。

## 5. 衛生改革者、ナイチンゲール

ナイチンゲールの後半生の仕事の大半は、不衛生で不健康な生活環境に対する国民の意識を改善し、具体的な衛生対策を提言し、それを実現させるという課題に取り組むことに費やされていた。彼女はまさに実力のある“衛生改革者”の一人であった。

感染症が猛威を振っていた時代にあって、ナイチンゲールは一貫して「感染症は予防できる」と主張した。そして、そのためには清潔で健康的な生活環境と、健康的な暮らしの営みが不可欠であると説いた。

ナイチンゲールはクリミアの体験を通して、感染症は具体的に狭苦しい部屋や、すし詰めめの病棟において発症しており、それが感染を誘発させる条件ではないかと見て取っていた。彼女は、過密状態に置かれた患者の中から、数種類の感染症が発生するのを目撃していたからである。

ナイチンゲールの見解は、以下のようなものであった。

「《避けられない》“感染”なるものは存在しない。感染は空気を通して行われる。人間が呼吸して空気が汚れると感染が起こる。」<sup>9)</sup>

「事例のどれをとってみても“感染”なるものは不可避なのではなく、ただ、ケアの不在と無知とからくる結果にすぎないということがすぐにわかる。」<sup>9)</sup>

「真の看護が感染ということの問題にするのは、ただ感染を予防するという点においてのみである。患者に絶えず注意を注ぎながら、清潔を保ち、開け放した窓から新鮮な空気を取り入れること、それが唯一の防御策であり、真の看護師はそれを人々に求め、また自らもそれを守る。」<sup>14)</sup>

このようにナイチンゲールは、「感染」は空気の汚れから起こるのであり、「感染」は予防することができるものであるという強い信念をもっていた。当時、この発想は科学的な知見を無視した“無知な見解”として槍玉に挙げられるのだが、各種の病原菌が発見され、それに対応するワクチンが開発されて、多くの感染症を予防できる今日の知見に立って振り返ってみれば、ナイチンゲールのこの見解は無知どころか、正論としての地位を保持するものであることは、異議のないところであろう。

感染症は、不潔な環境条件が原因で生み出された病気であり、それは私たち自身の手でコントロールできるものであるという確信こそが、ナイチンゲールの主張だったのである。

## 6. 病院建築家、ナイチンゲール

病院という建物の形態や、病院が果たすべき社会的役割については、今日の社会にあっては誰でも一様に理解しているが、ナイチンゲールの時代には、その機能や役割について、今日のようなイメージをもっている人はほとんどいなかった。「病院を“機能的建築”、すなわち、“その果たすべき機能を最大限に発揮するための施設”であるとする考え方が確立したのは、100年ほど前からのことで、それ以前、病院は、たとえば、僧院、宮殿、刑務所、兵舎など、元来、他の目的で建てられたものを転用して用いられてきた<sup>7)</sup>からである。病院が看護展開の場として今日的な機能を備えるようになったのは、実はナイチンゲールの業績によるところが大きいのである。

特に都市の病院に入院している患者は、入院することによって死亡させられている……。この事実に関心を注いだナイチンゲールがまず追究したのは、病院の構造が患者の入院期間や死亡率に影響を及ぼしているのではないかという点であった。追究の結果、彼女は当時の病院構造の欠陥を具体的に把握し、あるべき病院構造の原則をうち立てた。そして彼女は自身で病院の設計図を描き、具体的建築に際しては相談に乗り、それがどのような効果をもたらしたかと

いう評価まで行っている。

ナイチンゲールが考案したのは、パビリオン形式の病院構造だった。大部屋主体のパビリオン式病院構造は、彼女が生きた時代以前から、ヨーロッパ全体に存在していたが、ナイチンゲールはこの構造の特徴を高く評価したのである。シンプルなパビリオン式病院の良さは、ナイチンゲール文献によれば、以下の4点にまとめることができる。

- ① 自然換気が容易に、かつ完全にできる病棟構造であること。
- ② 看護面からみて、監督指導が容易にできること。
- ③ 患者の規律が守られやすい病棟であること。
- ④ 建築上および管理上、費用が少なくすむこと。

そして1871年、ナイチンゲールが指摘した条件を満たした病棟が、彼女の指導のもとで、ロンドンの聖トマス病院に建築された。これはナイチンゲール病棟のモデルとして歴史に残るデザインとなっている。

## 7. ソーシャルワーカー、ナイチンゲール

ナイチンゲール40歳代最後(1869年)の著作に、「救貧覚え書」という短い寄稿論文がある。この論文は、Bishop氏の分類によれば、第6群の「社会学に関する文献：9編」の中の1編として位置づけられる。

「救貧覚え書」というタイトルは、ナイチンゲールの著作全体から見ると、異色ともいえるテーマだが、本論文はナイチンゲール思想を解く上では必読書であり、ナイチンゲールの“ソーシャルワーカー”としての顔を知るのには、不可欠の論文である。

ソーシャルワーカーは、日本では「社会福祉士」と呼ばれ、1987年に国家資格化された。社会的弱者を相談援助業務の対象とする専門職である。ソーシャルワーカーは、ナイチンゲールの時代まで遡れば、ナイチンゲールが誕生させ

た看護職と同様に存在しており、社会的病理現象としての“貧困”というテーマに立ち向かっていた人々を指す。もちろん当時はソーシャルワーカーと称されていたわけではない。一般的には慈善事業家と呼ばれ、恵まれない人々の役に立とうと活動していた人々のことを指す。

まず時代の諸相を見ていくと、19世紀半ば、産業革命後の社会的大変動を通過したイギリスでは、貧富の格差が顕著となり、その日の食べ物も手に入らない最下層の人々が増大する傾向にあった。そのために国は従来の「救貧法」という法律を改正するなど、なんとか貧困者を救済しようと躍起になっていたが、莫大な金銭をつぎ込んで、一向に貧困者の数を減少させることはできず、彼らの生活を向上させることは至難の業だった。

そういう社会情勢にあって、貧困者の実態を調査し彼らの生態を熟知していたナイチンゲールは、抜本的な貧困対策の提案を計画し、自己の考えが盛り込まれた起案書を関係者に送るなどして、積極的に政府に働きかけた。その結果として、1867年に「首都救貧法」が制定され、これによってイギリスの福祉（慈善事業）は大きく転換することになった。こうした行動を、現代の福祉の世界では“ソーシャルアクション”と呼ぶが、ナイチンゲールの言動は紛れもなく、力強いソーシャルアクションそのものといえる。

「救貧法」の下にあった当時の貧困者は、貧困であるという事実によって、その人が病人であろうと、健康な身体をもってしようと、同じ処遇を受けていた。そこにナイチンゲールのメスが入ったのである。彼女は病人と健康人とを分けよと力説した。そして病人には病人のための施設を用意して、治療や看護が受けられる環境を作り、健康人には自活の道を教えるためのシステムを作るべきであると主張した。そこには、人間をすべて対等な存在とみなした上で、彼らが自活・自立していける道を探り、その道筋を提供することが、本来の援助の姿だと考えたナイチンゲールの視点が存在する。

このように、約150年前に、ナイチンゲールは今日の福祉の世界で掲げている“人々の自

立と自己実現”というテーマに取り組んでいたことを記憶すべきであろう。

ソーシャルワーカーとしての姿は、ナイチンゲールを“社会改革者”として位置づけることが可能である。

## VI まとめ

「実像のナイチンゲール」に一步でも二歩でも近づくためには、彼女が書いた膨大な資料を読み解かなければならない。断片的な資料からは、様々な顔をもつナイチンゲールを浮かび上がらせるだけである。

ナイチンゲール思想研究は、まだ開始されたばかりであるが、看護職としては、その根底に流れている看護観、疾病観、健康観に焦点を当て、21世紀の日本の臨床の中で、ナイチンゲール思想が形になるよう、努力していかなければならないと思う。

## 文 献

- 1) Huxley, E.: Florence Nightingale. Weidenfeld and Nicolson, London, p. 82, 1973.
- 2) 金井一薫: 実践を創る 新・看護学原論. 現代社, 東京, pp. 181-274, 2012.
- 3) 小南吉彦: 歪められたナイチンゲール像の伝播について (その1), (その2). 総合看護, 48(1): 51-63, 48(2): 49-61, 2013.
- 4) マクドナルド, L. (島田将夫, 小南吉彦訳): フロレンス・ナイチンゲール——直筆が語るその実像. 総合看護, 46(1): 6, 2011.
- 5) *ibid.*, p. 11
- 6) マクドナルド, L. (島田将夫, 小南吉彦訳): フロレンス・ナイチンゲール——直筆が語るその実像. 総合看護, 46(2): 20, 2011.
- 7) 長澤泰: ナイチンゲール病棟の発見——病院建築家の立場から. 総合看護, 14(4): p. 10, 1979.
- 8) ナイチンゲール, F. (湯横ます監修・薄井坦子, 小玉香津子ほか訳): ナイチンゲール著作集 第2巻. 現代社, 東京, p. 97, 1974.
- 9) *ibid.*, p. 202
- 10) ナイチンゲール, F. (久繁哲徳, 松野修訳): 英国陸軍の死亡率 (後編). 総合看護, 24(1): 26, 1989.
- 11) ナイチンゲール, F. (薄井坦子, 小玉香津子, 田

- 村真ほか訳)：病院監督から貴婦人委員会への季刊報告——ハーレイ街病院の看護管理：看護小論集——健康とは病気とは看護とは。現代社，東京，pp. 81-114, 2003.
- 12) ナイチンゲール，F. (湯楨ます，薄井坦子ほか訳)：看護覚え書。現代社，東京，p. 222, 2011.
- 13) *ibid.*, p. 14
- 14) *ibid.*, p. 61
- 15) ウーダム・スミス，C. (武山美智子，小南吉彦訳)：フロレンス・ナイチンゲールの生涯 上巻。現代社，東京，p. 165, 1981.